

西光院殿宇再建立勸化状

夫福行の中には布施を最とし、施興の中には古を興すを勝れたりとす。是即現世の求願を満し、当生の果徳を莊るの基なり。抑百間山西光院は行基菩薩の草創、弥陀如来の靈場也。在昔人皇四十五代聖武天皇の御宇、菩薩遍歴して天平十一己卯の春、当山に到り、其夜菩薩夢らく衣冠正しき老翁五人忽然として出現し告て曰、此土辺鄙にして人民暴兇なり、仏法を信ぜず神威を敬はず、唯放逸邪見のみ、濟度利生の善行菩薩宜しくこれを慮べし、我等須く擁護を加ふべし、我等は即熊野三所山王白山なりと宣へり。菩薩乃覚め信心肝に銘じ、因て弥陀堂を建立し、衆生を誘んと欲す。爰に常陸の州の太守阿部仲麻呂卿と云ふ人あり。素より広徳有信の檀越なり。彼に往て願意を演べ扶助を乞ふ。仲麻呂感発して封村の中二百余町を寄附し、尋で財を捨て建立の糧にあつ。且家臣鈴木左近將監重正、嶋村主計頭忠與、中嶋左衛門尉吉房に命じて奉行とし、地を鑿り基を開き、精舎を經始。菩薩即弥陀六八の悲願に擬ひ、東西八町、南北六町を結界し、其左右に門を建て、金剛神を勸請す。今猶其地を神会といふ。三ヶ年を経て天平十三辛巳の秋、弥陀大堂今に至て大堂といふ諸余の伽藍神殿坊舎悉く造功畢ぬ。規模広多にして殆んど東武の甲刹なり。其安置する所の尊像は菩薩手親一刀三拝して彫刻し給ふ所の阿弥陀如来、觀音、勢至、不動、毘沙門也。菩薩隨喜して曰、弥陀百体彫刻の宿願今は已に満足す、此尊像百の間其功最も精妙なりと。百間の号はそれに依て樹たり。仲麻呂居常陸の門馬故其音便を行て百間の訓とすと落慶の日、権現影向して菩薩に対面、報謝し給ふ。其地を今に現面といふ。宜なる哉熊野三所の本地は弥陀の三尊、山王、白山は不動、毘沙門の垂迹なり。今の鎮守五社権現是なり。弥より来一千百の星霜を過たり。星移り物換て堂宇衰替といへども安ずる所の尊像猶しも生身を押し奉るが如し。靈驗今に新にして、誠を瀝其信を凝すものは、祈願する所の事成就せざるはなし。即此地天に降雹の難なく、地に五辛の草生ぜず、若偶五辛を植るものも其子孫断絶す。浄土本縁經に一念弥陀仏、即滅無量罪、現受無比樂、後生清浄土といふ。これ豈唐捐ならん哉。越て天正年中、東照神君、先師日誓に祈願を充られ、永く寺封五十石并に寺中不入の御朱印を賜ふ。猶今堂社数字僧坊十二区存在するもの、偏に神君の恩沢、盛徳の致す所なり。これに依て常に三密の法水を挹て国家の天長を祈り、鎮に五部の觀鏡を磨て、幽明の冥福を薦奉る。況や又当山の旧規年毎に両度の法要、夏冬の論筵、月毎に朔望の法会、夏中の講式、今に怠ことなし。或時は灌頂壇を開き、或時は曼荼羅供を行じ、寔に密嚴仏国諸尊の都会壇なり。嗚呼有為は無常也、寛政五年癸丑の春正月廿七日失火の災に罹り本院地を扠て亡びぬ。小僧此におゐて激歎に勝ず方に今再建の願幢を立て、已前の輪奐に復せんと欲す。然ども衣鉢余長なく、自力弁ずることあたはず。貴賤檀越の助力にあらざるに依ずんば、何ぞ能くこれを濟ん哉。微塵積て山と成り、涓滴聚て川と成る。十方の緇素一粒一錢の物を投じて此功業を扶たまへ。童子砂を聚るの戯れも、猶功德測べからず。況や信心の財施におゐてをや。四方の施主現当の徳に飽き、六趣の衆生幽顯の福を饒にせん。同じく苦惱の郷を離れ、齊しく極樂の都に遊ん。

寬政六年（一七九四年）甲寅正月 百間山西光院 尊明 敬識